〝集う〟場所としてのACAC

アートの現場から ACAC通信

秋の訪れとともに、青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）で9月25日まで開催していた景観観察研究会「八甲田大学校」は会期を無事終了しました。この9月から12月にかけては、毎年行っている、公募によるアーティスト・イン・レジデンス（AIR）プログラム「Making Things（メイキング・シングス）」を、12月14日までの約3か月行います。

今年度は約2年ぶりに国外からもアーティストが実際に滞在できることとなり、ヴァネッサ・エンリケス（ドイツ）、橋本晶子、前田耕平、吉田真也の4名がACACで滞在制作を行い、ネイタン・ディコン＝フルタド（アメリカ）がリモートでプログラムに参加して、リサーチや制作、ワークショップやパフォーマンス、展覧会など様々なプロジェクトを展開していきます。

今年度のプログラムには「Making Things」というテーマをつけ、ACACのAIRの方向性を表しています。人類学者のティム・インゴルドは〝Things〟の語源を、人々の集い、人々が問題を解決するために集う場であるといいます。ここ数年、感染症や国家間の争いによってますます〝集う〟ことの難しさを改めて感じる日々ですが、国境なき営みであるつくること・人々が集まることで生じる創造的なコミュニケーションによって自分と世界はどう変容していくことが出来るのか。彼／彼女らが青森で繰り出す創造的な営みの中にその一端を見出し、来場者の方々ともその場を共有できればと願っています。

10月15日からはネイタン・ディコン＝フルタドが、リモートでのやりとりを前提に構想した「共同展示ラボーACACのフィールドワーク」をオープンします。このプロジェクトではACACの展示室を実験空間に見立てて、来場者も作品の一部をつくることでアーティストがその場にいなくても作品を通してコラボレーションができる試みです。10日には、プロジェクトのプレイベントとして15日のオープンに先立ち、展示室を開放するイベントを開催しました。当日はリモートでネイタンのスタジオと繋ぎながら来場者とともに作品制作を行いました。

また、11月に入ると、実滞在のアーティスト4名の展示も始まります。20日には、ゲスト審査員の鈴木ヒラク氏を迎えアーティストとともに青森での滞在や制作についての話をお届けするトークイベントも予定しています。

その他にも、各アーティストによる多彩なプログラムを開催予定ですので、ACACでこの秋どのような創造的な場が生まれていくのか、ぜひご期待ください。展覧会やイベントの詳細等はホームページをご覧ください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　武田彩莉）

（写真）ネイタン・ディコン＝フルタド《Fieldwork at CCB Gallery》、2022